みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

I　ダンゼン家の人びと

第一日めぬ（三月十六日）

外事局のスタッフたちが車をおりる。わたしも、おりる。わたしはすこし、どきどきしている。外事局の年輩氏が、

「サイノー？」

と声をかけた。ずいぶん略式な挨拶である。直訳すれば「よいか」というほどの簡単な質問。ゲルの戸口にたつ人びとは、

「サイン、サイン。サインバイノー？」

と応じる。でむかえは、老夫婦、その右手にやや痩身の若夫婦、左手にはどちらかといえば肉づきのいい若夫婦。こちらは、「よいですか？」とすこし丁寧なかたちの質問。わたしは、

「サイン、サイン。サインバイナ」

と応じる。いきおいづいてついまたさらに、

「サインバイノー？」

と語尾をあげてしまう。これでは、いつまでたっても挨拶がおわらない。

老父が戸をあけてゲルのなかへとまねきいれる。つぎからつぎへと人がはいり、ゲルのなかにちょう

ど十人。なお余裕があるほどこのゲルは大きい。十畳ほどもあろうか。
ゲルのなかでの最初の決まり文句は、
「デーシェー・ソー、デーシェー・ソー」
「上座へすわれ」という意味である。わたしは、思いきっていちばん奥へとすすむ。正面におかれた机のまえに、仏壇を背にして、戸口をみつめる位置に、すわる。片方のひざをたててすわる。それがモンゴル女性の礼儀正しいすわりかた。わたしの左手に老父があぐらをかいてすわり、つづいて戸口までずっと家人たちがたちならぶ。わたしの右手には、外事局のスタッフ。年輩氏、新任氏、運転手の順ですわる。
老母は机のうえに乳製品を山積みにし、乳茶をふるまう。老父が、
「エレーグイ・イデ」
とすすめる。エレーが「遠慮」で、グイが「無し」で、イデが「食べろ」、という意味。順番につないでいくと、「遠慮せずに食べろ」ということ。このように、モンゴル語は日本語と語順がおなじだから、おぼえるのはやさしい。
老父はさらに、外事局のスタッフたちに酒をすすめる。白酒（バイチュウ）である。この地方の銘柄「草原白酒」なら、そのアルコール度は五三度であるはず。客人はみな手で拒否してみせる。拒否しながら、とりあえず杯に口をつける。やっぱり、いっきに杯をほす。すかさず杯がみたされる。二杯めはさすがに本気で拒絶する。老父は、かまわないから飲めとすすめる。
「ハマーグイ・オー」
ハマーが「関係」で、グイが「無し」で、オーが「飲め」、という意味だから、「かまわず飲め」という意味になる。

献酒のあいだに、外事局のスタッフがわたしのことを紹介する。献酒がおわって、食事にうつる。肉うどんだ！　ああ、これこれ。これが食べたくてきたようなもんだ。中国は内蒙古にいても、フフホトあたりじゃあまり食べられない。ヒツジの肉を煮たスープに、自家製の切り麺。ほどよい塩あじに、ネギ少々。これほど滋養にみちたうまいものはない。くさみのないヒツジの肉は、モンゴル草原がつくる逸品である。わたしは、茶碗にやまもりの肉うどんをたいらげた。老父がふたたび遠慮するなと命令形ですすめる。

「エレーグイ・イデ」

おいしいものについては、遠慮するつもりがない。遠慮はほかのことにつかおう。だから、おかわり。外事局のスタッフたちも、これを楽しみにしていたのではないだろうか。わたしの倍は食べた。再度、乳茶がふるまわれだしたら、そろそろ暇ごいの時間である。

「それじゃ、わたしたちは一週間後にきますから」

4WD車から荷物がはこびだされる。わたしの荷物は二つ。カメラをおさめたケースと衣類のはいった袋。さらにとりだされたのは、野菜と瓶詰と缶詰。野菜はニラ、ネギ、ハクサイ、ジャガイモ、カブラ。瓶詰はくだもの。缶詰はイワシ。外事局は、外国人客を牧民宅にあずけるにあたって、このような品々を用意したのだった。最後に、わたし用のふとん一式がはこびだされると、車のエンジンがかかる。

ゲルの戸口と車との、わずかなすきまで、老父と通訳氏とが密談している。わたしのことだろうか。居候の期間や居候の値段が決められているのだろうか。それともわたしとは無関係な別の用件なのだろうか。聞かれたくなさそうなことに、聞き耳をたててはなるまい。簡単に密談はおわり、年輩氏が最後に車にのりこむと、4WD車は砂けむりをあげて立ち去った。わたしもまた、あんなふうに砂けむりをあげてやってきたのだ。

モンゴルの草原では、さよならのあと、さよならの相手がいつまでも視界から消えない。手前の砂けむりが消えても、向こうにあたらしい砂けむりがみえ、それが消えても、さらに向こうに最新の砂けむりがみえる。ちょっとセンチな人にとって、ここでのさよならは、たいそう名残惜しいものになるだろうと思う。それにしても、いまほど名残を惜しまないさよならもめずらしいと思う。わたしは、かれらを上機嫌でみおくった。

わたしの滞在については、すでに外事局をとおして承諾されているにちがいない。しかし、それとは別に、わたし自身の口から、この一家の主に居候をねがいでるのが筋というものであろう。

「わたし、ゆきといいます。いまフフホトで勉強しています。出産作業をみにきました」

たどたどしくはなすわたしに、家人たちはみな、首をかたむけたまま耳をつきだして聞く。聞こうと努力して、聞いてくれる。

「いまは季節がわるい。夏にくればすばらしい」

と老父がいう。わたしのことをやはり旅行者と思って、もっといい時期をすすめるのだろうか。ふるさとを自慢したいから夏を推薦するのだろうか。それともやはり、いまは迷惑だということの婉曲な表現なのだろうか。夏の草原がすばらしいことも、春の滞在が迷惑なことも、十分承知している。だから、心苦しい。それでもあえて居候をねがいでたい。この多忙な季節こそ、人と家畜の関係がもっとも濃密になると思うからである。家畜との関わりによって生活がなりたつモンゴル族の真実が知りたい。そんな身勝手を主張しなければならない。

「いそがしいときでありながら、人の家にすもうなんて、わるいことです。あなたたちにとって、迷惑になるでしょう。すみません。どうしても、出産作業をみたいので。モンゴルのやりかたを勉強します」

「あんたのうちも、牧畜業かね」
「いいえ。父は農家の息子でした。父の兄たちは農業をしています」
「そうそう、日本人は農耕民なのだ。牧畜はお国にはないのかね」
「あります。でも、おなじじゃない。遊牧ではありません。世界にはさまざまな遊牧民がいますけど、どれも方法がちがいます」
「そうかね。われわれは、モンゴルのやりかたしか知らん。ひとつ、あんたによその方法をならうとするかね」
話はすれちがっていくけれど、まずは話すことが肝腎。結局、二週間滞在する約束をとりつけた。
わたしは、自分のふとんと荷物をおしつけるようにしてできるだけ小さくまとめて、ゲルの戸口をはいった左側コーナーにおいた。ゲルの内部には丸い部屋がひとつあるだけ。一家が一室にすむ居住形態で、それぞれの部屋というものはない。ただし、それぞれの場所というものがある。このゲルも、伝統的な座をまもっている。
戸口をはいるとまず目につくのが、円形の中央に位置する炉。かつて五徳がおかれた位置に、かまどがすえられている。そこからは煙突がのびて天窓からつきでている。そのむこう正面の奥が主人の座。その左側に仏壇。「ホイモル」とよばれる奥の座である。戸口のわき右側が台所。女たちの座。戸口のわき左側が男たちの座。もしくは一般客人の座。わたしはそこに陣どった。
テントの内部配置ばかりでなく、テントの向きがそもそも伝統的である。どのテントも入口は南東をむいてひらいている。かれらは南を「まえ」といい、入口正面の方向すなわち南東をさす。北は「うしろ」であり、入口正面の反対側すなわち北西をいう。強い北西風をさけるための配置であるといわれている。

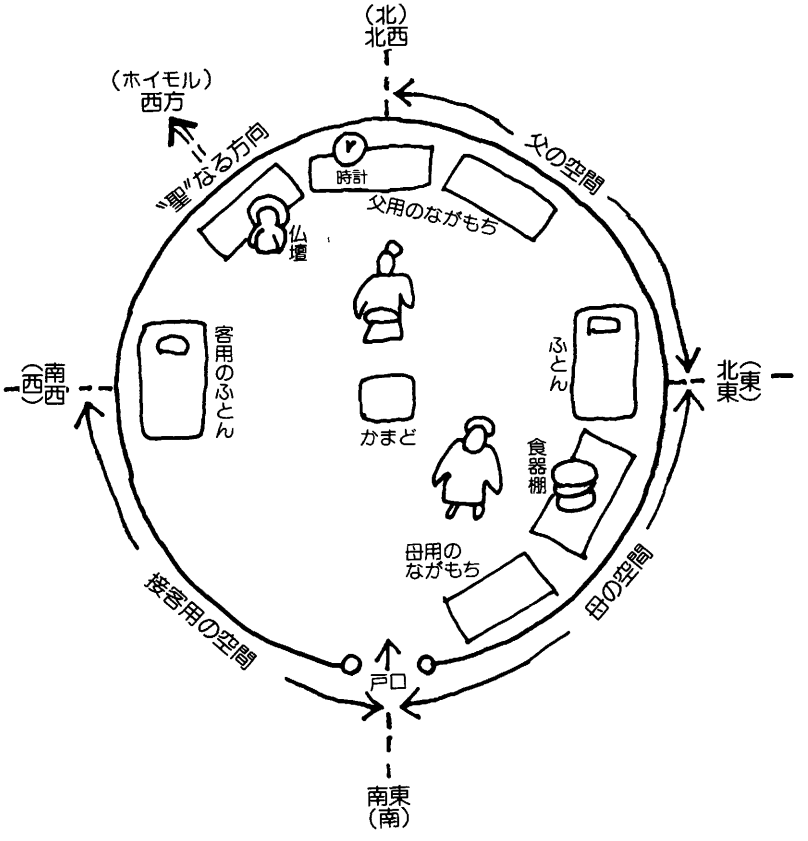

図3：ゲルの空間構成
( )内の位置はモンゴル流のよび名

さらに、四つのテント全体の配列方法もまた伝統的であることがわかってきた。老父母が十人の子どもたちについて説明しはじめたからである。

「おまえはなにがあるか？」

「なにがある」というのは「なにどしうまれか」ということ。いつのまにか、わたしは一家の主から「おまえ」とよばれている。モンゴルでは、女性に年齢をたずねても失礼ではない。また、なにかという表現を利用すれば、数を問題にするのではないような印象をあたえるから都合がいい。

「とりです」

「ということは、うちのリンチェンドルジとおなじだ」

こうしてはじまった老父の解説によれば……。

上から順に、へび、とり、いのしし、とら、うま、とり、いのしし、ねずみ、とら、ひつじ。娘、娘、娘、娘、息子、息子、娘、息子、息子、息子。五男五女で計十人の子どもたち。このうち、下の二人の兄弟がそれぞれ結婚して、ここに老夫婦とともにすんでいる。兄はすでに生計を独立させており、弟は老父母と生計をおなじくする。兄が東に、弟が西に。

それは、典型的な末子相続のすがたであった。末の息子が家長の遺産をひきつぐというのが末子相続。これは、上から順に、女は他家へとつぎ、男は独立していくと、最後に男子がのこる、という単純な道理にほかならない。上から順に去っていくのだから過度な放牧をさける合理的な方法といえよう。末子相続であれば、弟が本家で、兄が分家になる。室内の座とおなじく、南面して、西が上位、東が下位である。上位とされる西に本家の弟、下位とされる東に分家の兄がいる。

わたしは、この老夫婦の十一番めの子どもになって、老夫婦のゲルで寝起きすることになった。

ここに到着したのがおよそ正午。乳製品と茶と酒と肉うどんの接待をゆっくりうけて、午後一時。一

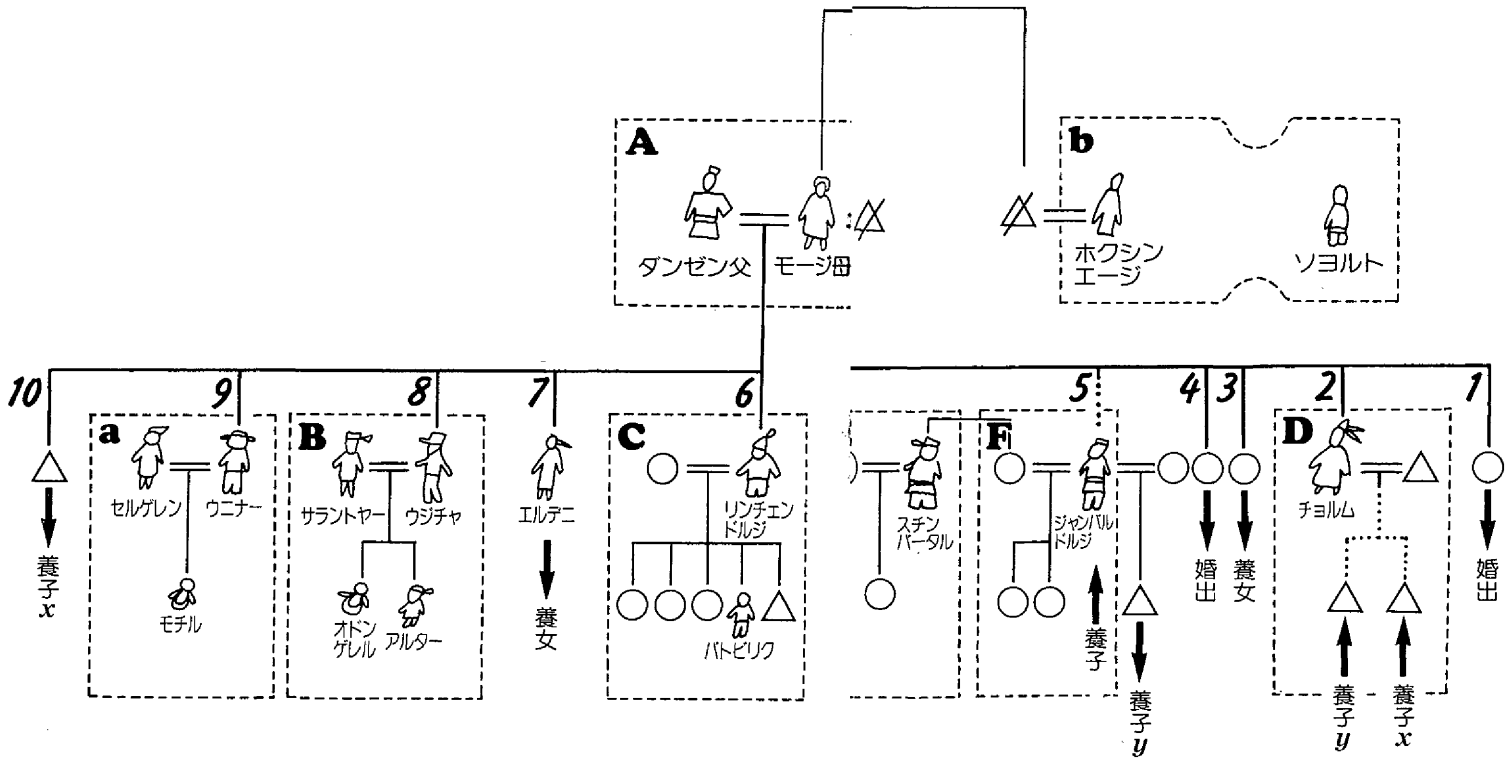

図4: ダンゼン一家のホト・アイル〈家系図〉

本文中の登場人物はイラストで、その他は△が男、○が女を表わす。
数字は、ダンゼン夫婦からみた子どもの番号。
破線でかこまれたボックスは、一つのゲルを示す。
アルファベットは、アイル（戸）とよばれる世帯を示し、Aとa、Bとbは同じアイルを作る。
このホト・アイルは、6つのアイル（戸）＝A（a）、B（b）、C、D、E、Fからなる。
この6つが2つずつペアを作り、3つのホト（設営地）にまとまっている。
A（a）とB（b）が北ホト、CとDが南ホト、EとFが東ホトである。

家の人びとの名前と年齢が解説されて、まだ二時。ときがすすまない。頭のなかはいまさっき知ったばかりの新しいことでいっぱい。フィールドノートをひらくと、もう四頁もかいた。それなのに、まだまだきょうがたっぷりのこっている。

どうして草原ではこんなに時間がゆっくりながれているのだろうか。つみあげた自分用のふとんにもたれて、しばらくぼーっとしていた。

老父がいなくなって、こんどは老母を相手に子どもたちのことを確認していると、彼女はさらに詳細に、そして正確に解説してくれた。ひとくちに十人の子どもといっても一様ではない。モンゴル語のことわざに、

「十本の指といっても、ひとしくない
十人の子といっても、おなじでない」

といって、十人十色を表現するが、まさにそれ。

彼女は十人の子どもを生み育てたという。ただし、事実に忠実にいうなら、九人を生んで七人を育てた。つまり、一人を養子にもらい、三人を養子にだした。さらに正確を期すなら、事情はかなり複雑である。十八歳で結婚してからもうけたのが四人の娘。三女は生後四ヶ月でもとめられて人手にわたした。子どもは三人にへったが、彼女の姪が嫁にいくまえにもうけた男児をひきとって、また四人になった。夫がロシア軍に捕らわれて行方不明になってから十年後、彼女は再婚した。そのときすでに三十五歳。現在の夫とのあいだには四男一女。そのうちの唯一の娘は、子宝にめぐまれない夫婦にあたえた。彼女が最後に出産した男児は、前夫とのあいだにもうけた次女がひきとっている。つまり、娘に息子を養子にだした。

わたしにとってついさきほどまで新しかったことが、もうすっかり古くなってしまった。これ以上お

しゃべりをつづけたら、もう頭がはちきれてしまう。乳茶をのんで、すこし横になる。昼寝をおえても、時間は経過していない。不思議だ。四つのゲルをひととおり表敬訪問し、あたりを散歩しても、まだきょうがのこっている。もう一度外へでて、もっと遠くまで散歩した。どこかにあるのかもしれない、時間のわく泉が。

これが、ワープの初体験。

本家の人びと

大きなゲルに老夫婦が二人。

父の名はダンゼン、かぞえで七十歳。息子やその嫁たちからアガーとよばれている。子どもたちが小さい頃によんでいた愛称が、いつしかよび名として固定している。

母の名はツェベルマー、六十七歳。モージとよばれる。モンゴル語の口語で、乳房および母乳のことをモームという。また母をエージという。モージとは、モームとエージの合成語のようなもの。まさに、おっぱい母さん。

西端のゲルに弟夫婦と赤ん坊の三人。

弟の名はウネルバヤン、二十七歳。フルネームを正確に発音できなかった子どもたちが、彼のことをウニナーとよんだ。当時の子どもたちは、みな成人してもうだれもそうよばない。甥や姪たちがきたらウニナーとよぶ。わたしは、年長ではあるものの、老夫婦の十一番めの娘としてあつかわれるのだから、ウニナーとよんでもよかろう。

彼の妻はセルゲレン、二十歳。セルゲレンはセルゲレンのまま。まだ新婚ムードがただよう。セルゲレンには生後五ヶ月になる長女がひとり。

ダンゼン家の人びと（本家と分家からなる北家）

分家の人びと

東端のゲルに兄夫婦と子ども二人の計四人。兄の名はウルジーチンゲル、二十九歳。ウジチャとよばれる。弟と同様に、ウジチャというよび名があるから、わたしはウジチャとよぶ。

兄嫁はサラントヤー、二十一歳。略してトヤーとよばれる。三歳になる娘アルターと、生後六ヶ月になる娘オドンゲレルがいる。

兄夫婦のゲルと大きなゲルとのあいだには、一回り小さなゲル。そこには、もう一人の老母と若い男の二人。

もう一人の老母の名はバヤンガラブ。トヤーの父の妹にあたる。六十四歳。モージ母は、年下の彼女を敬称でよぶ。モージ母にとって兄嫁であったから。兄弟たちから、ホクシン・エージとよばれる。ホクシン・エージとは、老いた母という意味。まさに老母。

若い男の名はソヨルト、二十四歳。モージ母の姉さんの孫。ヒツジ群の放牧者として雇用されて

ダンゼン家の人びと（南家）

いる。ヒツジを放牧する人は「ホニチン」すなわち「羊人」とよばれる。

ところで、わたしは人びとからさまざまによばれた。年輩の人たちは「ゆき」と名でよぶ。若者たちは「姉さん」とよぶ。子どもたちは「ナラン・エメー」とよんだ。ナランは「太陽」の意で、エメーは「母」の意だから、「太陽の母」という名前。日本人のことは以前から、日の人「ナラン・フン」とよばれてきたから、こんな明るい名がついた。